
総長と姫君

かなめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

総長と姫君

【Nコード】

N6774V

【作者名】

かなめ

【あらすじ】

人間と鬼が存在する世界。鬼は人々に恐れられていた。とある貴族の姫君と、鬼を総まとめにする長の恋物語。別サイトにて連載中。

都を大地震が襲った。その混乱に乗じてある集団が暴れ始めた。

ある者は家財を、ある者は食糧を奪われた。そして、何も持たぬ者は娘を奪われた。人々は彼らを”鬼”と呼んだ。その名の通り、彼らは冷酷で凶暴だった。ある貴族の屋敷にその集団のうちの数人が押し入った。もちろん、目的は金品だった。それに、逃げ遅れた女ども。ずかずかと屋敷に土足で乗り込んだが、金目のものは何一つ残ってはおらず、はずれだった。

しかし、逃げ遅れた貴族の姫がお付きの者とともに残っていた。押し入った彼女らを見るなり、付いていた女中は主より先に気を失って倒れてしまった。女中を抱えるようにして一緒に崩れた姫は、あつという間に彼らに囲まれた。下品な笑みを隠そうともしない彼らに虫唾が走ったのか、整った顔を歪ませた。

顎をつかまれ、もう逃げ道はないと覚悟を決めた姫の前に、銀色の髪をした青年が現れた。しかも、この緊迫した空気とはかけ離れ、片手に持っている紙袋の中にはあふれんばかりに甘味が入っており、彼はそれを食べていた。突拍子がなさ過ぎて、押し入ってきた”鬼”たちも唾然とした。しかし、自分たちと同類だと判断すると、さつきまでのことを続けた。続けようとした彼らはこの一言で止められた。

「兄ちゃんら、何しとんや？」

律儀にも青年に向き直って、話す。

「何ってお楽しみ中だ。お前はどっか行け」

「ま、そう言わんと。ワシはお前さんらを止めんといけんけえの」

菓子食う？ とでも言いたげな顔をしながら言うので、侵入者たちは苛立ちを隠せない。

「はぁ？ 何言ってるんだ」

「知らんのか？ 人間を襲うちやいかん。ワシら”鬼”の上層部が

決めたことじやろ。それすら、守れんとは情けないのう。お前さんの頭はもう捕まっとるじやろうな。まあワシを知らん時点でお前らなんぞ知れとるわい」

侵入者たちは顔色を変えた。気づいてしまったのだ。銀色の髪をした青年が現在の”鬼”を率いる資格を持つ、総長・正宗だと。鬼の総長は世襲が多いが、基本的に能力が高く、聡明な強い者になる。だから、総長には誰も頭が上がらない。

「あ、総長とは知らず、大変無礼を」

「そんなことはどうでもええ。その娘を放せ。お前さんらの処罰は追って知らせる。早う、往ね」

侵入者たちは我先にとあわててこの場から立ち去った。

彼が手を出さぬのをわかっているのか、か弱げな容姿とは裏腹に、倒れた下の者を引きずりながらも屋敷から抜け出した。

青年は言葉こそ交わさなかったものの、じっと自分を見つめる漆黒の瞳に心を惹かれた。自分のような者を見ても臆すことなく、下の者を世話する主の役割を果たしたその気丈さに惹き付けられたのだった。自分のような――鬼を。

「あの娘、何としてでも手に入れたいものだ」

青年は今までに感じたことのない感情が芽生えたのを感じた。

「で、都を襲ったんか」

静寂の中で、正宗の凜とした声が響いた。

先日、都を襲った張本人たちは裁きを受けていた。彼らが都を襲ったのは、自分たちの畑で食べ物が入らなくなり、金もなく、困って仕方なくというものだった。

「じゃが、それは自身が招いた結果じやろ」

正宗の言うとおりであった。彼らの畑は荒れに荒れ、とてもじゃないが、植物が育つような状況じゃなかった。しかし、それはもう何年も耕していない、手入れの一つもしていないからだった。

「自分の怠慢な心が結果として表れたんじゃ。真面目にコツコツや

つてりゃ、そんなことにはならなんだ」

それは明らかだった。彼らは領地を丸ごと奪われ、城で軟禁されることになった。

あれから、しばらくして、かの姫にお見合いの話が上がった。全国から候補を募ることだった。身分等も関係なく、男子なら誰でもとだけ書かれていた。青年にとってはまたとない機会だった。それを聞いて、行こうと決めるのにそう時間はかからなかった。

「将太」

腹心の部下の名を呼ぶ。

「ワシは例の姫が見合いをするって言うんでな、それに行く。早々に支度せえ。支度ができ次第、出立じゃ」

将太は仕事が早い。その日のうちに支度を済ませ、その晩には出立の手はずが整っていた。主の、一刻も早く会いたいという気持ちが将太にはわかったようだ。

「正宗様は、かの姫が欲しいですか、必要ですか」

「ああ、今までに出会った女子とは違う何かがあった。人とも鬼とも違う何か——きつとそれに惹かれたんだろうな。だから、欲しい」

思いふける正宗はいつもとは全く異なる、仏頂面ではなく、穏やかな笑みを浮かべていた。将太もそれ以上は何も訊かず、何も言わなかった。

かの姫の屋敷までは馬を使った。正宗とは対照的に真っ黒の牡馬だった。彼は正宗の愛馬であり、名馬と賞されるほどの体力と速度を持ち合わせている。名は小鉄。無論、名付け親は正宗だ。将太も身の回りの世話をするために、一緒についてきた。彼もまた、青毛で小鉄の相棒にあたる時雨とともに後に続いた。

出立の日は最悪だった。しばらく、馬を走らせると、雲行きが怪しくなり、雨が降り始めた。どしゃ降りの冷たい雨が肌に突き刺さる。

「正宗様、大丈夫ですか。急ぐ気持ちはわかりますが、この先は河ですが、この雨では氾濫しているかもしれません。今日は宿で休みましょう」

「ああ、頼む」

将太は近くの宿屋に入り、宿主と話をつけに行った。正宗は取りあえず、馬と木陰に入り、雨を避けた。

「宿が取れました」

将太が走って戻ってきた。二人は馬を預け、宿に入った。

「狭いところで申し訳ありませんが」

迎えたのは年老いた店主とその息子だった。いくら狭いとはいっても、手入れは隅々まで行き渡っており、夕飯も美味しく、申し分なかった。将太がこの露天風呂はいいと言っていたので、入ることにする。

月がよく見える美しい夜だった。今頃、愛しき姫は何をし、何を思っているのか、ふと正宗は考えた。

だいたい身体も暖まり、のぼせる手前で湯から上がった。部屋に戻って窓辺に腰かけると夜風が心地よい。

「正宗様、露天風呂はお気に召しましたか」

将太が手元に何か持って入ってきた。

「店の主人に言って酒を頂きました。この辺りの地酒は美味いと有名なので、お口に合えば良いですが」

正宗は杯を受け取って、入れられた酒を飲む。噂どおり酒はなかなかのものだった。将太は酒が飲めないため、正宗一人で飲むしかない。すると、店の主人が夕飯と若い芸者を二人連れてきた。

「旅の癒しになればと思い、この街で有名な芸者を用意いたしました。余計なことでしたらすぐ下げさせますが」

「いや、いい。そのまま上げてくれ」

芸者二人は特に媚を売るわけでもなく、単に舞を披露したり、三味線を演奏したり、お酌したり、他愛もない話をするだけだった。まるで、正宗が媚びを売る者を嫌いとしているのを見越したかのようだった。

「お前、名は何という」

自分の脇でお酌をしていた黒髪の芸者に正宗は尋ねた。

「かぐやと申します」

ただそれだけ答えるとかぐやはそれ以上何も言わなかった。

「お前は鬼を恐れぬのか」

「それは、怖いに決まっております。ですが、同じお客様には変わりありません。旦那さんはむやみやたら、弱い人間に害を与えるような方ではないとお見受けいたします」

この芸者はよく人のことを見ているようだ。的確に相手の人柄を読みとることができるとは、見た目の年齢からしてはなかなかだと正宗は思った。

「そうかい。お前はなかなか聡いのう」

ここまで興味深い人間に出会ったのはかの姫を除けば、初めてだったので面白い。

「またこの辺りに寄った頃に店へ行こうかのう」

芸者が帰る時間となり、そろそろ寝ないと、旅に支障が出る。将太が寝支度を始め、正宗も寝ることにした。

やはり興味深い人間とはいえども、かの姫ほど心引く者ではなかった。何をしようとも頭から離れない愛しい姫を思い起こした。

翌朝、この日からの道のりは長く、また天候にも恵まれなかったため、予想以上に時間がかった。何とか見合い会場に刻限までにたどり着き、望まざる客として案内された。着けば、すでに大勢の男たちが座っていた。正宗も適当な場所に座ると、屋敷の主が現れた。主は正宗に目を止めたが、すぐに何事もなかったかのよう話を始めた。

「ようこそ、いらっしやいました。我が娘——芙蓉のために来てくださったこと、感謝しております。今から娘を呼んで参りますので、暫し待たれよ」

主はとりあえず席を外し、この場は見合い相手のみとなった。

他の見合い相手は多種多様だった。ぽっちゃりとした体型の者、がっちりとした筋肉が着物からもわかる者、単に痩せすぎの者、姫の年齢よりも明らかに上回っている者、見目麗しい者、それぞれだった。姫と会うということで、それぞれ身なりを整えていたが、や

っても大して変わることもないので、正宗はわざわざそんなことをしなかった。

姫が入ってきた瞬間、正宗は様々な感情が一気にこみ上げてきて、そのあまりの衝撃に思わずめまいがした。

姫は入ってくるなり、こう言った。

「遠路遙々来ていただきまして、ありがとうございます。」

始めにはっきりと申し上げます。

わたくしと結婚しても、父の身分は手に入りません。そして、わたくしにその気がなければ、この場の誰と結婚することも無いということ、承知くださいませ。ご不満な方はお帰りください」

姫の一言でこの場にいたほとんどが帰ってしまい、残ったのはほんの数人だった。

「では、手前の方から自己紹介を」

姫の後ろに控えていた年配の女性がこの場を仕切り始めた。正宗にとっては他の者のことなどどうでもよく、姫さえいればそれだけでよかった。

自分の番が回ってきて、正宗はなんと言おうか迷ったが、思いの丈をぶつけることにした。

「私は初めて逢ったその時に見た、あなたの真っ直ぐな心に恋い焦がれてきました。自分が鬼の総長であり、また、あなたにそぐわぬ身の上だということも重々承知です。ですが、あなたを忘れることもできず、こうして参った次第です。」

正宗。生涯かけてあなた様を愛し、守り抜くと誓いましょう」
思っていたことをすべて吐き出してしまえば、不思議と心がすっきりした。

「もちろん、あなたにその気があれば、ですが」

他の候補者たちが動揺を見せたのをはっきりと感じ、思わず嘲笑的な顔になりそうになったが、姫の面前、それはこらえた。姫は面に出すまいと必死に堪えているようで、取り繕っていたが、うろたえていることは正宗にはお見通しだった。愛しの姫のその様子がなんとも言えず、正宗の心をくすぐった。

「本日はこれまで。後の面会はお約束なさった方からとなりますゆえ」

先ほどの年配の女性が姫を連れて出ていった。正宗以外の候補者たちは案内役にそれぞれが割り当てられた部屋に急いだ様子で向かい、正宗はそのまま残っていた。特に理由があった訳ではない。少し気になるところがあった。なぜ見合いをすることになったのか。貴族にとって身分というものは自らの権力を誇示するものであり、それを捨てることなど皆無だ。むしろ、娘などは地位を獲得するための道具でしかないはずだ。にもかかわらず、大納言はそれすらもしない。意図が見えないことは思いの外、興味をそそる。

そして、ずっと待たせてあった案内役と将太と共にあてがわれた部屋に向かう。落ち着いた色彩の部屋だった。大納言は趣味がいいらしい。置かれた家具は全て一級品だ。きつとどの部屋も一様に揃えてあるのだろう。

将太が入れてくれた茶をのみ、一息つく。やはり、思うのは芙蓉のことばかりであった。

「文をしたためないのですか」

将太は正宗に尋ねた。おそらく、他の候補者たちは次の面会を求めべく、姫に趣向を凝らした文を送っている頃合いだろう。

しかし、今そうすることははばかられた。あのようなことを言った手前、なんと送ればよいのか困ったからだ。

そのとき、誰かが部屋を訪ねてきた。表に出ると久我の当主がそ

ここにいた。

「ちよつといいかね」

正宗は快く招き入れた。従者を二、三人連れてはいたが、やはり、鬼の元に来るのは油断ならないのか、緊張しているのが伝わってくる。

「突然、悪かったね。君にこういう話をするのもどうかと思ったんだが、先ほどの娘との面会の話を女中頭に聞いたのだ」

大納言は将太が出した茶を一気に煽ると緊張がほぐれたか、話し始めた。

芙蓉が生まれてから、大納言の妻は病にかかり、それが悪化してほとんど我が子を抱くことなく死んだ。新しい妻をめとる気にもなれず、芙蓉の乳母であった女中頭に母親代わりを、そして彼女に礼儀作法の先生の手配を任せた。母を亡くした娘をこれ以上、不幸な目に会わすことはできないと、いくらい縁談があっても本人の意思を優先させ、これまで全て断ってきた。

それがつい先日、都を大地震が襲い、混乱が収まった後、帝から召し上げようとお声掛けがあった。しかし、大納言は娘には愛する相手と幸せになってほしい——かつての自分のように。そう思っていた。だから、身分問わず未婚の男性を集めた。

「安藝殿、私は娘を不幸になどしたくはない。好かぬ相手と一緒に。それがいかに辛いことか……。芙蓉が君を選んだならば、鬼だろうと私は構わない。遠慮などは無用だ」 正宗は納得した。

なぜこのような異例の行事をしたのか。正宗にとっても好都合だった。「言われずとも、愛した 女子

おなご

を不幸にするようなことにはしません。この命続く限り、生涯懸けて守る覚悟はできてます」

今日は熱があるのか、恥ずかしい台詞が口からこぼれやすいよう

だ。このような熱い言葉も普段は決して出はしないが、どうも姫のことになると気持ち溢れる。

大納言もそれで納得して帰ってしまった。もしこの場に他の従者がいたならば、笑い転げ回っているにちがいない。想像しただけでいら立つ。それでも姫のことを考えれば、姫へのいとおしい気持ちが勝る。

「将太、わしはどしたら姫を手に入れることができるんか。姫の気持ちこころが知りとうてたまらん」

外を見ると、既に日が暮れていた。夜風に当たろうと庭に出ると、池に月光が差して反射している。

そこに他の候補者が通りかかったが、皆、鬼が恐ろしいのかちら視線を送るだけで、話しかけようとしてもしてこない。そうだ、人間が鬼を怖がらないはずがない。大納言ですら始めは緊張していた。姫が嫌わない理由がない。

なぜ鬼が貴族の娘の見合いに来ているのか。きっと喰らいに来たに違いない。

それもそうか。そう思われてもおかしくはない。むしろ逆だ。他の鬼も人間にとんでもない印象を与えたものだ。笑いが漏れる。きっとこのような姿も人々が近寄らない原因だろう。

「おい」

声をかけられた気がしたが気のせいかな。

「おい、無視すんな」

再び声をかけられた気がして、声をする方を振り向いた。すると、たしか鹿野相馬しかのそうまといったか武家の三男坊である、男が立っていた。まさしく武士もののふ。体つきも大きく、何より勇ましい。

「なんか用かい、お武家さん」

相手をするとやはり恐れたか怯んだようだ。

「な、何をしている」

「ああ、今は月を見ておったんじゃ」

「呑気なもんだな。皆が陰で何を言っておるのか、知らぬわけではなからう」

なるほど、このお武家は嘘や陰口がどうも苦手らしい。真っ直ぐな心根の持ち主だ。好感が持てる。

「まあ、みてくれも人間とは違う。力も強ければ、不思議な力を持つものもある。悪さをしてきた鬼だっていないわけではない。ならば、嫌う人間も少くない」

陰口などない方がおかしい。

「悔しくないのか」

相馬は正宗の返答を待つ。悔しくないのか。そんな感情さえも昔に忘れてきてしまった。今はただ悲しい。それだけだ。

「そんな感情、持ち合わせとらんもんでね。言いたい輩には言わしときやええことじゃ」

相馬はただ黙って隣で一緒に月を見ていた。

「名前、正宗といったか。今日話してわかった。」悪いやつじゃねえ”ってな。あんた、あの姫さんが好きなんだろう？ その恋路、協力しよう」

「自分のことはええんか？」

「いいんだ、こっちも事情が事情ってね。あんたの協力を俺がしたい」

言葉の裏を探ろうとするが、彼に裏があるとも思えない。信用できるとは思われる。

「わかった。お前さんの申し出、ありがたく受け入れよう」

相馬はニカツと笑って見せると、今日は遅いからと与えられた部屋へ戻っていった。

まったく奇妙な人間だ。

部屋に戻ると、将太が寝支度を始めていた。

「おかえりなさい。遅かったですね」

「奇妙な客人がいたものでな」

相馬のことを簡単に話し、正宗は自らも寝支度を始めた。そのとき、文が届いた。美しい装飾の施された漆塗りの文箱に入っていた。差出人は文箱を見ればわかった。姫だ。まさか、向こうから届くとは思ってもよらなかった。文からは姫と同じ香の匂いがする。自ら手にとって広げた。

『明日、一番にお会いしたく思います。辰の刻にお越しください。』

芙蓉』

簡潔にそう書かれただけではあったが、正宗にはそれで十分だった。姫が文をくれたという事実だけでよかった。

「将太、書くもん用意せえ」

すっかり寝る支度は出来ていたが、将太は文句も言わず、言われたものを用意した。正宗は同じように簡単な返事を書いておく。あまり細かいことを考えている暇はない。一緒に何か送るべきかとも考えたが、あいにく、そんなものは用意していない。それに姫が喜びそうなものは何一つ知らなかった。

悩んでいたが、答えは見つからず、そのまま文を同じ文箱に入れて将太に持って行かす。自分はそのまま床についた。

「お召し物は何になさいますか？」

将太がある程度持ってきていた中から選んでくれていた。昨日の服装はそんなに考えていなかったが、二回目に会うのだから、それなりに考えたほうがいいだろう。将太はなかなか趣味がいい。どれを選んでも大丈夫なようにしてくれる。基本的に身なりを気にしない正宗のせいもあるだろう。

正宗は淡い紫の菖蒲の柄の入ったものを選んだ。自身の銀髪とあいまって、一見、おぼろげにも見えるが、瞳の深紅がよりいっそう際立っていた。

「こんなもんかね」

将太が帯や羽織の最終確認をして、手土産に人間界では少し珍しい髪飾りを持つ。細やかな硝子細工で、姫の豊かな黒髪には似合いそうだった。持ってきた荷物でこれだけは正宗自身が選んだものだ。髪飾り自体に深い意味合いはないが、物を贈ることが大切だった。

「失礼いたします」

姫の侍女が呼びにきた。

いよいよだ自然と身体に力が入る。贈り物は将太が持っているのが問題ないだろう。この屋敷までの道のりに比べれば、全く苦にならぬはずなのに、足が重い。正宗は目的の部屋の前まで来て、やっと自分が緊張していることに気付いた。

「お入りください」

姫の凜とした心地よい声が響く。入れば、すぐに姫しか視界に入らなくなる。姫は澄ました表情で座っている。淡紅色の小桂姿だったが、今日は翡翠だった。何でも似合うと思ってしまうのは、惚れているからなのか事実そうであるのか、正宗には判断できなくなっていた。

「お招きに預かりまして」

「堅苦しいの、好まないの。皆、下がってくれるかしら。二人で話したいのです」

正宗が鬼だからか、男と二人きりになるからか、もしくはその両方だからか、洩る侍女もいたが、姫は何も受け入れなかった。意外と頑固者のようだ。侍女の方が折れて下がる。将太は察したらしく侍女達に合わせて下がった。

二人きりになった。

「安藝様」

名前を呼ばれて姫の方を向くと、視線が合う。途端に目を離すことができなくなった。

「貴方にお礼を言わなくてはなりません。あのとき、貴方が現れてくださらなければどうなっていたことか。考えたくもありません。心から感謝いたします」

「いえ、あれは」

「あら、楽にしてほしいと言ったつもりでしたのに」

最初とは変わり、年相応の感情豊かな面を見せてくれるようになった姫は魅力的と表現するには言葉が足らなすぎた。

「じゃ、失敬して。遠慮なく。あんときはたまたま通っただけじゃけえ。ワシは特に何もしとらん」

本当にあれは偶然だった。姫を襲った輩は以前から目をつけていた。何か仕出かすのではないかと後をつけていただけなのだ。

「されば、そういうことにいたしましょう。此度はこのような形で会うなど、思いもよりませんでした」

芙蓉は驚いたというが、このようなことをする方がどれほど衝撃を受けたことか。姫の父から事情を聴いていなければ、姫を問い詰めたかもしれない。改めて感謝する。

「安藝様、次の方がお越しになりました」

この楽しい時間も侍女の声で終わってしまう。沈黙が長すぎた気がしないでもない。さすがに侍女の手前、姫相手に樂はできない。姫も澄まし顔に戻ってしまった。

「最後に、芙蓉様へ贈り物を」

そう言って持ってきた髪飾りを差し出す。

「硝子の髪飾りでございます。芙蓉様に似合うかと思ひまして」

「ありがとうございます」

襖が開かれて退出を促される。次の人間が影にいるのが見える。相馬だ。すれ違いざまに目が合う。相馬は口角を上げて見せた。心配するなという意味だろう。正宗も軽くうなずいた。

自分の部屋に戻って今日の姫の様子を思い返す。侍女たちがいなくなつた途端に饒舌になつた。もしかしたら、姫自身は良くとも、侍女たちがよく思わないのかもしれない。ならば、自分は姫に合わせよう。それがきつと得策なのだろう。

しかし、あのような姫の顔を見てしまったら、もう会えない時間を耐え難く感じてしまう。他の者から見たら狂っているのかもしれない。

「正宗様？」

将太が気になつたのか声をかけてくる。そういえば、ここまで回りを気にせず考え事に耽ることはなかった。姫のことを考えると、そうならざるを得ないのだから仕方ない。

「いやあ、何でもねえわ。最近、考え事が多くてな。頭ア、痛うて」
「茶でもお淹れしましょうか」

「ええよ。そうじゃ、将太はどう思う？　姫はワシのことを好いんかの」

「私は今日の様子を見る限り、正宗様に気があるのではないかと思います」

正宗はそれを聞いて、また物思いに耽つた。

おそらく、大納言や姫の反応からはそんなに悪い結果にはなりそうにないだろう。しかし、姫の自分に対する感情は恋慕というよりは尊敬、感謝、そういったものが多くを占めているだろう。恥ずかしながら、あれだけの熱意をぶつけようとも態度を改めたりもしなかった。姫は色恋に関しては鈍いのではないかと思った。それに侍女含め女中どもは反発的な態度をとっている。正直、彼女らは関係ないが、姫は流されてしまうのではないか。自分の他に相応しい男子がまだいたらしい。確か、帝が召し上げようとか言っていたはずだ。人間の女の中では最高位につける唯一の方法だ。女中にすれば、

姫の幸せを思うがゆえの当然の思いだ。

悩んでも答えが出ないのはいつものことだった。将太に酒を持ってきたら。来る途中寄ったところの地酒だ。美味かったので何本か買って持ってきたのだ。ちょうど、そのとき相馬がやってきた。今日の面会のことと話があるらしい。一緒に酒を交えながら語るところにした。

「俺といるときは、全く笑顔すら見せなかったな。姫さんは感情を一切面に出さねえ。ありゃ、生半可な気持ちじゃ落とせねえな」

「お前さんは、ええ男なのにな」

「まあ、武家だし。三男坊だからな。将来、何もない。侍女、女中連中もあまりいい顔しなかったしな」

今のご時世、貴族の時代だ。武家出身というだけでも、扱いは下だ。姫付きの多くは下級貴族の者のはずだから、少なからず自分の親戚と一緒にあってほしいという魂胆くらい持ち合わせているだろう。

「ま、最も。俺はあんたに協力するんだからな。……そういや、あんたの話にゃ、ちいとばかり、反応してたぜ。俺も一瞬で見逃しそうになったが、ありゃあ確かだ」

「本当にそうなら苦労もせんのかい」

「何か心配事でもあるんかい？」

「姫はどうも色恋に関しては鈍いようじゃ」

そう思った過程について話すと、相馬は目を丸くした。

「俺もたまげたあの告白をねえ。あんなにまっすぐな思いの丈をなかつたことにされちゃあ、かなわんな」

男二人で杯を交わしながら、話しても何の意味もない。後半はただ無言で酒を飲んでいた。

「じゃ、俺は部屋戻るからよ。またな」

「氣いつけてな」

相馬を見送ったが、まだまだ寝るには早すぎた。仕方がないので、

畳に転がった。残った人間は相馬以外に誰がいたか。思い返してみようと指折り数える。

葛城庄太郎。かつらぎしやうたろう 商業で大当たりした成金貴族で、元々、商家に過ぎなかったが、数代前に貴族の娘を嫁に迎え、貴族の仲間入りを果たした葛城家の長男だ。齡、二十一。成金らしく指には金や宝石の指輪がいくつもはまっていた。金に眩んだ者なら、与すこともあるだろう。今回の目的は貴族を身内に入れることらしい。

朝倉桔平。あさくらきつぺい 由緒正しい公家の者には代わりないが、今や、落ちぶれた没落貴族で、朝倉家の長男だ。齡、十九。誇りだけは持っていて、久我家も朝倉家ほどの歴史を持っている訳ではないので、少し見下したようなところがある。ただ純粹に姫に対して好意を持っているようだ。

桐生元次郎。きりゆうもとじろう 策略家で知られる桐生家の次男坊。桐生家の男は皆計算高く、実力でのしあがった。とはいえ、彼らの多くは変人、奇人と呼ばれるほど、偏った趣味・趣向を持つ。誰も好んで近寄らない。元次郎本人は女装癖があるらしい。彼は顔も整っているのに残念だと娘たちが嘆いているらしい。今回、参加した理由は不明だ。
花谷源。はなやげん 宝石商の長男だ。現在は父と共に全国を旅しているらしいが、これのために旅も中断してきたようだ。姫を使って何か企んでいるらしい。

自分を入れて五人。難しいかもしれない、と弱気になっていられないのも事実だった。

将太が文を持ってきた。その様子からして、部下からの報告書だろう。見ると、新たな問題が起こったらしい。

報告書によれば、正宗が留守にしている数週間に鬼たちが好き勝手にしているようだ。部下たちもそれぞれ対応しているようだが、捌ききれないことも多々あるらしい。今すぐ戻ってやらねばならないのは山々だが、今回ばかりは譲れない。部下たちに頑張ってもら

う他ない。

手助け代わりの軽い指示を書いて文を出す。これで、ある程度は持つだろう。見合いの期間は半月と短い、ここまでの道のりが結構かかる。見合いが終わってすぐ帰っても遅くなる。いつもは彼らに気を揉まされるのだから、今回は彼らに気を揉んでもらおう。

それは置いといて、明日からはまた忙しくなりそうだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6774v/>

総長と姫君

2011年10月16日13時54分発行